

# フランク王国の商業交易

——アンリ・ピレンヌの構想を中心に——

増 田 四 郎

總じて商業交易史の研究が、單に商業政策及び商業制度の歴史、乃至は文化交流の一側面として評價される以外に、いはゞそれ自體として、諸民族の政治・法制・經濟等、あらゆる社會的諸機構の變遷推移を解明する上に、如何ほどの役割を演じ、また内面的にそれに參與しうるかといふことは、昂められた意味に於ける商業史研究の方法を見つけないとする吾々にとつて、極めて興味ふかき一課題である。そしてこれを西洋中世史に徴せば、かの近東貿易に關するウィルヘルム・ハイド、地中海商業に關するアードルフ・シャウベ、北歐商業に關するワルター・フォーゲル等々巨匠の手になる古典的なる諸名著は、そのゆたかな内容と共に、いづれもかうした方法確立上の貴重な類例として、熟慮參照さるべきはいふまでもなからう。しかし、それにもまして吾々は、少くとも當面の課題に最も適切な解決の一方向を提示し、たとへ「商業史」と銘うたずとも、諸著を通じて絶大の示唆を學界に齎すと同時に、みづから獨自固

フランク王国の商業交易

2 有の一般中世史體系を完成せるものとして、こゝにベルギーが生んだ卓絶せる史家、アンリ・ピレンヌ (Henri Pirenne, 1862-1935) の名を想起せざるを得なす。

若くして畢生の大著『ベルギー史』の筆をおこし、或ひは史書文献集の編纂に、或ひは中世都市の研究に、また或ひは一般中世史、わけても中世社會經濟史の綜合に、夫々敦厚珠玉の如き佳篇をのこしたピレンヌの業績は、大戦當時彼自身が嘗めた艱苦に滿つ研鑽生活の想ひ出と共に、既に周知の事實であり、今更こゝに多言を要しないであらう。たゞ併し、吾々當面の行論上、特に注目すべき一事は、『ベルギー史』を除く他の諸論著の多くが、概ね商業交易史を中心に把握せられ、しかもその全體系が、時にはあまりにも明瞭に、殆んど唯一不動の着想をめぐつて、多彩にも慎重に展開されてゐると認められる點である。しからはその着想とは何であるか。それはいふまでもなく、十一世紀以降、まづヴェネチア及び下ライン低地々方といふ南北兩歐の二大中心地にはじまり、やがて西歐全般にひろがりゆく主張される彼の所謂「商業の復活」てふ基本的觀照の潜在である。<sup>(五)</sup> 廣大な視野と美しき體系、しかもその裡に吾々は、彼の祖國ベルギーをはじめ、和蘭・北佛蘭西等の諸地方が歐羅巴史上に占めた社會經濟史的意義の積極性ともいふべきものが、誇らかに秘められてゐる事實を看過してはならぬ。

さて、中世高期を直接の對象とするかうした觀照自體への吟味と考證とは姑く措き、いま吾々の疑問として追究するべきは、それが少くとも「復活」である限り、史上如何なる時代に存した商業の復活であり、また復活の母胎となり得た基礎的な社會機構は、如何なる發展の推移を示したか、殊にはまた、舊き時代の商業交易が、果して何を契機として没落過程をたどらざるを得なかつたか等々の諸點であり、これを瞭かならしめてこそ、ピレンヌ史學の全體系

は、まさに畫龍點睛の完璧を期し得るものといふべきであらう。

尤も、この問題に對するビレンヌの解答は、既に従前發表された諸論稿の隨處に斷片的ながら窺知され、<sup>(七)</sup> わけても晩年の諸著には、一應體系化の域にまで達してゐると思考されるほど明瞭に認められたのであるが、<sup>(七)</sup> 最近彼の歿後、その遺稿として最も重視すべき名著、『Mahomet et Charlemagne』<sup>(八)</sup>の刊行されるに及んで、その根本的構想が、いはゞプロパーなテーマとして、愈々白日の下に呈露された。一見奇異の感をさへ與へるその書名にも拘らず、内容がもつばらフランク王國の商業交易を主題とし、あたかもそれを通じて宣明された叙上の解答に該當するが故に、敢てこの書を中心にビレンヌ史學の一斑を紹介批判し、併せてフランク王國發展の文化史的意義を窺ふ一助たらしめんと欲する所以である。されば本稿の叙述と考察は、ビレンヌの構想一般よりすれば狭小に失し、テーマそれ自體としてはあまりにも尠大に過ぎるの矛盾を含むことを、最初より斷らなければならぬ。

#### 附註

- (一) Geschichte Belgiens (Heren-Ukerts Geschichte der europäischen Staaten), 4 Bde. Göttingen 1890-1913. Histoire de Belgique, 7 vols. Bruxelles 1900-1932.
- (二) Bibliographie de l'Histoire de Belgique, 3. éd. Bruxelles et Gand 1931.
- (三) Medieval Cities, their origins and the revival of trade. Princeton 1925. Les villes du Moyen Age. Bruxelles 1927; Histoire de la constitution de la ville de Dinant au moyen age. Gand 1888. 等參照。
- (四) Histoire du Moyen Age, par H. Pirenne, G. Cohen et H. Focillon, (Tom. 8. de l'Histoire générale publiée sous la direction de Gustave Glotz, 1933.); Histoire de l'Europe, 3. éd. Paris et Bruxelles 1936.

フランク王國の商業交易

(五) *Les villes du Moyen Age* の紹介を中心に、この問題を取扱った邦文々獻に、高村象平教授「中世西歐に於ける商業の復活」(『三田學會雜誌』第二十七卷第七號所收)がある。就いて参照せよ。

(六) 例へば *Mahomet et Charlemagne*. *Revue Belge*, I. 1922 ; *Un contraste économique, Mérovingiens et Carolingiens*. *Revue Belge*, II. 1923 ; *Le commerce du papyrus dans la Gaule mérovingienne*. *Comptes rendus de l'Académie des Inscriptions et Belles Lettres*, Paris 1923 ; *L' instruction des marchands au Moyen Age*. *Annales d' Histoire économique et sociale*, I. 1929, 等の諸論文。

(七) 殊に *Les villes du Moyen Age* の第一章及び第二章の敘述を參看せよ。

(八) *Mahomet et Charlemagne*. Paris et Bruxelles 1937. 英譯版 *Mohammed and Charlemagne*. translated by Bernard Mall, New York 1939. 以下本書の引用は後者に據る。

## 一

唯一神アラアの御名を叫んで、政教合致、全アラビヤの國民的團結を成就し、やがてコーランと劍とを手にした回教騎士が、四隣に征服を企てつゝ、破竹の勢もて東西兩洋に跨がる一大世界帝國を建設するの不動の基礎を供し、またかの絢爛たるサラセン文化育成の素地を築きあげたイスラム教の始祖マホメット (571-632)、他方、漸く普及を見んとするゲルマン諸族の基督教化を支持し、相次ぐ遠征を通じて中歐に覇を唱へ、紀元八〇〇年、羅馬教權との結合によつて戴冠、こゝに西羅馬帝國の滅亡以來はじめて見る基督教的西歐の統一を完了し、ゲルマン民族の大部分を包攝する集權的文化國家を整備して、所謂「中世歐羅巴」誕生の文化史的・政治史的中核を形成したフランク王國不生出の英主カール大帝 (768-814)、かうした世界史的二人人物を、その背後に流れる大きな社會經濟史的動向の波に乗せ、

主として民族大移動このかた、フランク王國の解體に及ぶ商業交易史を中心に、兩者がもつくしくも密接なる因果關係を描出し、一方、回教徒の活躍が歐羅巴史上に演じた役割を見定めると共に、他方に於て、歐羅巴中世紀に見る封建的社會經濟機構の一般的様相を瞭かならしめんとするビレンヌの遺著、『マホメットとシャルルマーニュ』の構想は、まことに一個のすぐれた史家が到達した思想の圓熟と體系の完結とを證するにふさはしい一種侵し難き魅力を含んでゐる。以下吾々は、しばらく本書の叙述に従ひ、フランク王國商業交易の變遷に關する注目すべき主張の概要を、その全體系との關聯に於てあとづけてみたい。

まづ本書の構造を見るに、大きくわかれて二篇より成り、第一篇は『イスラム以前の西歐羅巴』、第二篇は『イスラムとカロリング王朝』となつてゐる。そして前篇に於ける考察の焦點が、民族大移動以降に見る地中海統一文化の連續性に置かれ、後篇のそれが、回教徒の勃興侵掠による地中海交易網の切斷封鎖と、あたかもその半面をなすカロリング王家のクーデターを通じて齎らされた「中世紀」の誕生とに向けられてゐるといへば、ひとは既にその構想の輪廓をほゞ推測し得るであらう。即ちその全貌を極めて端的な表現もていへば、民族大移動よりメロヴィング王朝末期までの西歐社會は、いはゞ開かれた體系裡にある古典的地中海文化の存續であり、回教勢力の西進によつて、はじめてこの統一的文化圏の紐帯が破壊さるゝや、商業交易の止むなき不振は、やがて西歐羅巴の全體をして世界商業への關聯より離脱せしめ、急激にこれを農業化せしむると共に、政治的には全く新しき經濟的基礎に立つカール大帝の偉業を可能ならしめたと觀るものであり、かく觀じてこそ、新しく出發する封建的中世歐羅巴の姿が鮮明に浮びあがると主張するわけである。

しかし乍ら、吾々に肝要なのは、かうした輪廓そのものに對する早計なる是非の論斷ではなく、寧ろそれを内側から支へる彼獨特の史觀と、史實論證の方法についての吟味である。それ故、こゝでは特に問題の所在を明かならしむるため、最も本質的なりと考へられる主張の要點を抽出し、それを通じて吾々自身の問題設定を企てなければならぬ。

かゝる見地よりする時、まづ最初に擧げらるべきは、古典古代の文化とゲルマン民族の大移動、就中ゲルマン諸國家の中心勢力を形成しつゝあつたメロヴィング王朝時代フランク王國との史的關聯についてであらう。ピレンヌは、まづ本書の冒頭、ゲルマン民族侵入以前に於ける古典的「ローマニア」文化圏の地中海的性格を強調し、貨幣・宗教その他諸方面の經濟的・文化的統一をのべ、この圏内に入り來るゲルマン諸族移動定住の諸様相をあとづけ、結局ゲルマン民族の南下は、ローマニアの傳統をして失はしむるところ極めて少く、ゲルマン諸部族國家といふも、ブリタニアのアンゲルザックセン及びフランケン、アラマンネン、バイエルン等、一部邊疆諸族を除くこの圏内の他の諸部族は、大局より觀れば、いづれもみづからの特質を解消して古典文化の中に全く包攝せられ、わづかにガロ・ローマ的融合文化の特質を示すメロヴィンガー王家治下のフランク王國と雖も、要するにこの大文化圏の一隅に發達した一勢力に過ぎず、従つてその政治的・經濟的關心は常に南方に向けられ、かのランゴバルド族の伊太利侵入に際して見らるゝビザンツ勢力との折衝は、その最も顯著な表明であると主張する。

そしてこの基本的構想を具體的に強化する論證として、當時に於ける地中海商業の國際性が、極めて鮮明且つ詳細に描出される。この部分こそは、まさにピレンヌ史學の本領であり、吾々がさきに商業史的考察の重要性を力説した

所以である。即ち、西羅馬帝國滅亡後と雖も存続する貨幣經濟の優越、市民的生活の殘存、ガリア諸都市人口構成の國際的性格、シリア人・ユダヤ人・アフリカ人等の商業活動、ガリア諸港わけてもマルセーユ・ナルボンヌ・ニース等地中海沿岸諸港の驚くべき繁榮、絹・香料・パピルス・燈油・奴隸・駱駝・オリヅ油・藥草等々取扱商品の國際性、遠隔地商人の實例、諸侯貴族の財寶蓄積、硝子工業の發達、金ソリドゥスに基く貨幣制度の統一、利子の嚴存、商業資本家群の存在等々に關する叙述は、文學及び藝術に見る東洋的・古典的色彩の殘存、社會道德に於ける古典的・世俗的性格の優越等文化史的考察の綜合と共に、多くはすぐれた佛蘭西史學界の諸文献を縱横に引用してものされた所論であり、その點、獨逸史學界に親しみ來つた吾々にとつて、特に傾聽すべき多大の示唆が藏されてゐる。

それは兎に角、およそ叙上の如きピレンヌ所説の概要をたどる時、吾々は直ちにかのウイーン史學界の耆宿、アルフォンス・ドーブシュ教授によつて屢々強調された所謂「文化連續説」<sup>(二)</sup>との興味ある比較を想起せざるを得ない。商業交易の殘存に關する數多き例證を挙げ、新興ゲルマン民族の侵入に基く文化破壊の通説を否定して、古典的世界の連續を主張する點、一見兩者徑庭なき相通の構想に似る如くであるが、その實斷じて然らず、一脈の注目すべき類似の故に、却つて吾々は、その間に横はる極めて根本的なる觀照の相違を指摘しなければならぬ。何となれば、ピレンヌに於ける連續性の問題は、飽くまでも古典的「地中海文化」<sup>(三)</sup>そのものゝ連續であるに反し、ドーブシュのそれは、<sup>(四)</sup>は斷絶(Katastrophe)なき「文化」のナチュラな連續を豫想し、それが擔當を交替するローマン・ゲルマン兩民族の文化史的意義を、それ自體としてザツハリツヒに、しかも充分高く評價せんとする立場であり、従つてピレンヌに見るゲルマン的要素の輕視、乃至は否定消滅主張の態度<sup>(四)</sup>は、ドーブシュにあつてはことさらに直接の關心事とは

なり得ないものであらう。尤もビレンヌの考察がローマニア文化圏を中心とするに反し、ドーブシユのそれは後の獨逸諸地方を主たる對象となすため、そこにおのづからなるかうした構想の相違を齎したとみるべき要素も介在するが、しかし周到にこれを觀れば、それは決して單に對象の相違のみによるのではなく、遙かにそれらを越えて、大きくは兩者の史學體系、または史觀そのものゝ異同をさへも暗示する本質的なものに依存することを、深く推知熟考すべきであると考へる。

ついで、第二の問題としてとりあげらるべきビレンヌ主張の要點は、回教徒の侵掠が西歐、殊にフランク王國の商業交易に與へた決定的影響の評價についてである。基督教普及の緩漫性に對して回教傳播の驚くべき急速性を説き、ゲルマン民族の弱體化に比して回教徒の強烈性を主張したビレンヌは、まづマホメットの歿後、僅か一世紀をいわずして波斯・シリア・埃及・北亞弗利加・西班牙等を併せ、東は印度より西は大西洋に及ぶ所謂サラセン帝國の一大建築物を形成した回教徒勃興の經過をあとづけ、その間、わづかに侵略を防いでみづからの政治的統一を保持したビザンツ帝國、並びにかのポアティエの會戰(七三二年)に回教勢力の北進を挫きつゝも、海軍力の絶無と相次ぐ執拗な南方不安の故に、独自の發展を餘儀なくされたフランク王國の、爾後たどるべきくしき運命を彷彿せしめる。即ち、ポアティエの戦もさることながら、七一一年、回教徒による西班牙の勝利と制海權の掌握こそ、まさに西部地中海の封鎖を意味し、遠くポエニ戰役以來、永くその傳統を誇つた羅馬的地中海文化圏の統一は、あえなくもこゝに破壊せられ、「東洋」と「西洋」との截然たる分離が結果されると共に、二つの世界的宗教圏、即ち回教世界と基督教世界との對立が、史上明瞭に齎らされたと力説する。<sup>(一六)</sup>かくて吾々はそこに、もつばら伊太利政情の複雑な變遷をめぐつて對



峙するビザンツ帝國及びフランク王國なる二大政治的中心に支へられた「歐羅巴」の姿に接するのであるが、この「歐羅巴」、別してはカロリング王家治下のフランクを中核とする「西歐羅巴」が、回教徒の西進によつて齎された決定的なる諸影響とは、果して何であつたらうか。曰く、アラビヤ人により愈々活況を呈したカスピ海よりヴォルガを通じてバルト海に出る新商路の發達、マルセーユをはじめ地中海沿岸南佛諸港の衰微、聖地巡禮路の變更、アルプス越えの發達、ガリア地方に於けるパピルス使用の消滅とそれに代る羊皮紙の流行、香料の貴重品化、阿弗利加産燈油の消滅と蠟使用の普及、絹及び絹織物の激減、諸侯貴族の質素と金の缺乏、銀デナリウス貨の鑄造普及、商人階級の減少、「商業交易」なるものゝ一般的意義の變質、猶太人の獨占的活動、東西兩洋をつなぐ仲介者としてのヴェネチア及びビザンツ特殊地位の向上、南伊諸都市の複雑極まる政治的動向、フランク諸都市の衰亡、政治的中心の北方への移行、王室及び諸侯財政の土地經濟依存、基督教的西歐統一の努力、「羅馬理念」の變遷、ビザンツ帝國との分離等々、總じてビレンヌによつて例示される諸現象は、およそ前代に見たそれとは全く對照的なるものであり、彼の所謂「*crise économique*」想定の方づよき根據として重視さるべき所以である。尤もビレンヌと雖も、かうした諸現象のすべてが、回教徒の侵入によつて突如惹起されたと観るのでは決してない。その或るものは既にメロヴィング王朝末期の頽廢期に深く根ざし、また或るものはカロリング王家の勃興自體によつて招來されたことを、充分慎重に配慮し、そこにはゞフランク王國全體の政治法制的考察を加味してゐるのであるが、それら内外の諸現象が、渾然合流してフランク王國史の相貌を一變せしむるほどの重大な轉換契機を齎したのこそ、まさに回教徒の侵掠に外ならなかつたと視る點、社會經濟史乃至は商業交易史に基く全歐文化史的變遷の體系化を意圖する限り、彼にとつて不動の構

想といふべきであらう。それ故、彼によれば、紀元七・八世紀こそ「古代」と「中世」とをわかつ最大の分岐點であり、古典古代の傳統を失つた基督教的中世歐羅巴が、あらたに「ゲルマン民族」てふ新興文化要素の積極的參與を加へて、それみづからの歩みを踏みいだした記憶すべき時代に該當する。カール大帝によるあの偉大なフランク王國統一事業の世界史的意義も、あたかもかうした觀點より綜合把握してはじめてその全きを得ると見なされるわけである。<sup>(一九)</sup>

想ふに、叙上の如きピレンヌの着想は、全歐羅巴史の舞臺に動く諸勢力の消長を察し、その間、カール大帝の偉業を可能ならしめた西歐社會の政治經濟的基礎を推定する上に、たしかに絶大の示唆を含んでゐる。しかし更に進んで吾々に疑問となるのは、回教徒の西班牙占領が、果してピレンヌの主張するが如き深甚の打撃をそのまゝ持續し、また全回教國の統一が常にそれほど緊密であり得たかといふことであり、殊にはまた、フランク王國の商業交易が、メロヴィング王朝とカロリング王朝とに於て、顯著な對照を來したといふ意味を、單純に後期に於ける商業の衰微不振なりとして片付けられ得るかといふ點である。そして最初の疑問は、本格的にはサラセン史、殊にアラビヤ人商業史一般の問題として吟味されなければならない。従つて、吾々自身全くその資格を缺くものであるが、ピレンヌが引用せる資料の性格を窺ふ時、あたかもかの基督教的中歐に南下し來つた異教徒ノルマン民族の破壊行爲過大視の危険にも似た一脈の技術的不安を覺ゆるが故に、敢てこの疑問を指摘し、サラセン側史料の公正なる評價を念じつゝ、立入つた考證はすべて他日を期したいと思ふ。それ故吾々考察の眼は、こゝではもつぱら疑問の後者、即ち“contrastive economic”の想定に向けられなければならない。

ピレンヌ主張の第三に擧げらるべき要點たるこのメロヴィング王朝對カロリング王朝の經濟的對照の問題は、最初

に掲げた文化連續説の場合と同様、ドーブシュ教授の主張と比較することによつて、最も瞭かにその意義を理解し得る如くである。即ちビレンヌにあつては、古典古代とメロヴィング王朝との文化連續を重視し、これを徹底的に斷絶破壊するものとして、回教徒の侵入並びにメロヴィンガー末の頽廢期を想定するが故に、その經濟的對照の比較も、常に五・六世紀のメロヴィング王朝と八世紀のカロリング王朝、わけてもカール大帝時代との對比てふ形をとつて、前景におしだされることとなる。問題の重心を對外貿易の有無に置き、國際商品の流通、諸多思想の交流に想ひをいたし、また古典的教養の在り方に注目する限り、かうしたビレンヌの主張は、確かに一面の眞理を含んでゐる。しかし乍ら、かゝる諸現象を經濟的・文化的發展一般に照していはゞ第二義的のものと觀じ、社會機構の本流自體は恒に間斷なき連續發展を示すものと考へ、現象よりも本體の推移を、従つてまた諸様相の變轉をそのまゝ地方別・時代別に描出せんと欲する時、問題の構圖は全く別個のものとなり、メロヴィング王朝盛時よりその政治的頽廢期を経て、カール大帝に至る全過程が、「フランク王國の經濟發展」として、綜括的に把握され得る充分の場を提供するであらう。國家法制の變質を考へ、政治動向の内面的意義を慮るものは、須らくこの點にも慎重の考察をほどこさなければならぬ。ドーブシュ教授の構想は、まさにかゝる立場に準據し、その一方向を示唆する最もすぐれた實例ではなからうか。(11)

およそかくの如き立脚地の相違の故に、ビレンヌのいふ「商業交易」乃至は「經濟發展」なるものゝ意義と、ドーブシュ教授のそれとの間には、一見類似の如くであり乍ら、既に最初から蔽ふべからざる觀照の對立を示してゐる。そしてこのことが、あたかも同一史料を引用するに際しても、全く異つた結論のための資料となり得る所以であり。(12)

その點、メロヴィング・カロリング兩王朝の區別を比較的輕視するドーブシュの方法には、總じて年代混淆の憾多<sup>(三三)</sup>く、またあまりにもこの區別を重大視するピレンヌのそれには、先入主によつて支配されたる曲解、または一面的解釋の誹をまぬかれ難いといはなければならぬ<sup>(三四)</sup>。されば、ピレンヌの引證する「メロヴィング王朝」商業交易の史實は、そのまゝドーブシュによつて、「フランク王國」の商業交易を證する一證據と見なされ、またカロリング王朝の農業經濟化を強調するピレンヌの體系中には、下ライン低地々方及びヴェネチアといふ二大例外が設けられなければならぬ<sup>(三五)</sup>。しかし、ピレンヌに於けるこの例外的現象の指摘こそ、まさに十一世紀以降に見る彼の所謂「商業の復活」を活かす決定的指標であることを、特に深く念頭にとどむべきであらう。

これを要するに、兩者の所論を顧みて吾々の行ふべき操作は、メロヴィング王朝に於ける對外貿易が、カロリング王朝に至つて如何に變遷したかといふこと、並びにカロリング王朝にいふ商業交易が、そのまゝの意義に於て、メロヴィング王朝、更には民族大移動期にまでも、如何なる程度に遞求の糸をたどられ得るかといふことの二點を、一應二つの系列として公正且つパラレルに比較考慮し、その間から、「フランク王國」商業交易の眞に本質的なる主流を、一般文化史的推移の裡に浮びあがらせることであると考へる。

(九) H. Pirenne : *Mohammed and Charlemagne*, Chap. I, pp. 41, 45, 70-74. 參照。

(一〇) *Ibid.* Chap. II の敘述を只た。

(一一) *Ibid.* Chap. III 參照。

(一二) A. Dopsch : *Wirtschaftliche und soziale Grundlagen der europäischen Kulturentwicklung*, 2 Bde., 2. Aufl., Wien 1923 u. 1924 ; *Derselbe* : *Das Kontinuitätsproblem. Vom Altertum zum Mittelalter*, (Beiträge zur Sozial-u.

Wirtschaftsgeschichte, Gesammelte Aufsätze, 2. Reihe, Wien 1933, S. 258-274. 所収) 等参照。尙ほまた、この問題をめぐる最近獨逸史學界の動向については、拙稿『古ゲルマン文化連續性の問題』(『社會經濟史學』第九卷第七號所収) を參看されたい。

(一三) Mohammed and Charlemagne, pp. 33-45. 参照。

(一四) 特々、Ibid. p. 123, 138. 等参照。

(一五) Ibid. p. 149. 以下参照。

(一六) Ibid. pp. 153-161.

(一七) Ibid. pp. 154-185. を参照せよ。

(一八) 同書第二篇第二章、『カロリントウ王家のターミターと教皇權の急轉回』(一八六—二三五頁) なる一文は、ビレンヌに於けるフランク王國の政治法制史觀を、最も簡明且つ端的に表現したものと見て、特に注目に値する。彼のかうした方面に關する最大の概説書『歐羅巴史』の第一及び第二章の敘述と共に、フランクの政治法制史を窺ふものと參照すべき好個の文章と見做す。

(一九) Ibid. pp. 224-235. 参照。

(二〇) ノルマン民族南下の文化史的評價については、W. Vogel: Die Normannen und das Fränkische Reich bis zur Gründung der Normandie (799-911). Heidelberg 1906; A. Bugge: Die Wikinger. Bilder aus der Nordischen Vergangenheit. Autorisierte Uebersetzung aus dem Norwegischen von H. Hünigerland. Halle a. S. 1906; K. Th. Strasser: Wikinger und Normannen. 2. Aufl. Hamburg 1928. 等を註書を參照せよ。

(二一) A. Dopsch: Die Wirtschaftsentwicklung der Karolingerzeit. Bd. 2, 2. Aufl. Weimar 1922. 殊にその第十一卷『商業交易』の條を見よ。尙ほこれを關聯して參照すべきは、Inama-Sternegg: Deutsche Wirtschaftsgeschichte, Bd. I, 2.

フランク王國の商業交易

Anfl. Leipzig 1909. 第二篇第五章の叙述である。

(一二) 例へば、カロリング時代幣制改革觀の對立、同時代に於ける市場設置の意義に關する對立、かの有名な資料イブル・コルダマーの『道里志』引用態度の相違等、列擧に違がなく。

(一三) これにききては特に、Grundlagen. Bd. 2, S. 433-475. の叙述を参照せよ。

(一四) 例へば、W. Heyd : Geschichte des Levanthandels. Bd. I. Stuttgart 1879. Erste Periode. „Die Anfänge. Von der Völkerwanderung bis zu den Kreuzzügen“ の記述を讀み、マンヌの引用態度と比較せよ。

(一五) Il. Pirenne : Mohammed and Charlemagne. pp. 238-241.

### 三

大略以上によつて吾々は、ピレンヌの異色ある構想を中心に、フランク王國商業交易史の研究にふくまるゝ主要問題の所在を概觀した。そして、一見安易にさへ考へられるかうしたテーマの中に、實は「古代の終焉」と「中世の誕生」とを見定める極めて重大なる契機の存することを指摘し、特に歐羅巴史學界論争的たる所謂「文化連続性の問題」に觸れると共に、ひいては、吾々東洋にあつて、西洋諸民族文化の特質を窺はんとするものゝ深く反省すべき課題、即ち「歐羅巴世界の成立」ともいふべき問題設定の可能性を、ひそかに示唆する興味ある觀照に接し得たわけである。換言せば、フランク王國の商業交易なる問題は、それ自體として西歐羅巴史研究の主要課題たるのみならず、ピレンヌの如く回教徒の演じた史的役割を重視する限り、直ちに以つて歐羅巴史全體、乃至は世界史の問題にまで昇められるてふ所以を、ほど推測し得たことと思ふ。かくして吾々は、一方に於て、さきに試みしが如く、ピレンヌと

ドーブシュとの比較の中から、西歐中世史の推移を具體的・實證的に吟味しゆく端緒を見いだすと同時に、他方あらたに、更に擴大された視野と構造との關聯に於て、この問題をとりあぐべき一應別個の半面が存することに想到するであらう。直接にはピレンヌ所説を動機となし、しかも結果に於ては、あたかもかくの如き新領野展開の好例を供したと考へられる注目すべき研究として、吾々はこゝにドーブシュ教授の後繼、エルナ・パッツェルト女史の勞作、『フランク文化とイスラム』<sup>(二六)</sup>なる一書を擧げなければならぬ。以下簡単に本書の所説をあとづけ、その間から、プロヴイゾーリツシュな本稿の結びを導きいだしたい。

パッツェルトの研究は、嘗てピレンヌが發表したフランク王國と回教徒との關聯に關する諸論稿を、特に主たる攻撃對象となし、その批判に即して、自己の初期中世史觀、乃至は歐羅巴文化の基礎構造觀を示唆せるものなるが故に、そのまゝ以つてピレンヌの遺著『マホメットとシャルルマーニュ』の批評であると見做すことが出来る。さて、パッツェルトの結論をさきにいへば、個別的・具體的なる史實の諸反證と、地方的差別相の複雑性重視の故に、ピレンヌの美しくも大膽簡明なる體系は根柢より動搖を來すべく、殊に回教徒の侵入を以つて、西歐羅巴史全體の運命を決定せる最大の世界的要因なりと觀するが如きは、他の重大な史的諸事象に照して、到底許され難き構想であるといふに歸する。しかし吾々の興味を惹くのは、かうした結論それ自體、即ち女史の研究に屢々見うけられる一見ポレーミツシュな否定的結論形式ではなく、寧ろその論證を通じて表はされた積極的な歐羅巴文化史觀の構造についてである。最初『一つの新しい學說』<sup>(二七)</sup>として、ピレンヌの主張を忠實に紹介したパッツェルトは、まづ攻撃の第一矢を、所謂「地中海文化」なるものゝ分析に放ち、羅馬帝政末期以降の地中海周邊諸領域は、決して統一的な文化圏を形成する

が如き緊密等質的なるものではなく、思想的・宗教的には勿論、經濟的・法制的にも、諸要素混淆の複雑な相違を呈し、殊に北方屬州の諸地方には、顯著な民族主義の醸成擡頭が窺はれると主張する。<sup>(二九)</sup>即ち諸多の差別相、わけでも民族主義の強化を以つて、メロヴィング王朝の或る特殊性を想定し、その漸次的發展の裡に、おのづからカロリング王朝にみる政治法制的發展の萌芽を見定めんとする伏線が張られてゐるわけである。

かくの如く、ピレンヌ主張の前提を一應覆へしたパツツェルトは、ついで愈々熱烈に、ピレンヌが比較的輕視したと思はれる全く別個の新領域、即ち初期歐羅巴史に働きかけた北歐ゲルマン文化圏がもつ史的意義の重要性を強調する。<sup>(三〇)</sup>即ち、回教徒の侵入なかりせば、フランク王國を中心とするゲルマン的文化の成長開花は、到底望み得なかつたであらうとなすピレンヌの着想に、斷然反對の立場を表明し、新しき古ゲルマン文化研鑽の諸成果を引用して、北歐文化圏の永き獨自的發展をあとづけ<sup>(三一)</sup>、同時にまた、それが南方、殊に東方諸民族との絶えざる交渉を通じて齎したあの多彩な展開過程を、極めて詳細に描出する。この點、希臘・羅馬の古典世界より問題の把握をねらつた從來の諸研究に反し、フランク王國の性格を、北歐並びに東方スラヴ諸族との、文化史的・交易史的關聯を配慮して窺知せんとする最も傾聽すべき立論といへよう。ビザンツとの交渉、ヴィキングの影響等は、いづれもかうした系列上に評價さるべき顯著な事例に外ならない。<sup>(三二)</sup>

回教徒侵掠以前の狀勢を、既に叙上の如く觀するのであるから、パツツェルトにとつて殘されたる問題は、當然回教徒の強烈性否定と同化性重視、並びにその政治的統一力の破綻を立證することに存する。<sup>(三三)</sup>そしてこの考證は、吾々がさきにピレンヌ所論への疑問として掲げたところに、一應の解答を與ふるものであるが、女史自身の態度が、回教



史專攻の成果をそのまま表明するといふよりも、寧ろ推理の整備と論駁をいそぐ傾き強きが故に、これまた必ずしも吾々の不安を解消せしむるに役立つてゐない。従つてその反證として擧げられるカロリング王朝時代對外商業交易、乃至は文化交流の數多き諸事例も、要するにドーブシュ教授の流れをくむ亞流に過ぎず、問題の本質究明にあづかるものとはいひ得ないであらう。

たゞパツツェルト所説の重視すべき點は、ピレンヌの體系を一應打破して、全く個別的なるものに細分せるものゝ如く粧ひ乍ら、しかもみづからはより廣い領野に「歐羅巴」を形成する諸文化要素を考へ、商業交易をはじめ諸々の相互交渉裡に、漸次に形成されゆく文化史的核心または單位ともいふべきものを、極めてザツハリツヒに示唆してくれたところに存する。いま假りにこれをフランク王國の商業交易についていへば、まづ王國の民族的・文化的素地をなすゲルマン的・ローマン的要素の潜在と成長とを考へ、悠久の過去より絶えずそれに働きかけた北歐諸部族活動の影響と、東方ビザンツ及び東洋との交渉を考慮し、更に南方古典古代の傳統と新興回教圏の役割とを、各々それ自身として酌量評價してこそ、はじめて公正なる畫像が全面的に瞭かにされるといふべきであらう。そしてこのことは、極めて當然のことであり、決して新規の立言ではない。たゞしかし、歐羅巴史の發展契機を、如何なる立場から何によつて把握し特色づけるかてふ史觀の對立の故に、史家夫々の異つた相貌をうみいだすといふに過ぎない。とりわけ、商業交易の史實を重視する三人の史家、しかもフマニスティッシュな色彩に一脈の共通點をもつすぐれた三人の史家、ピレンヌ、ドーブシュ、そしてパツツェルト女史の、ひとしくフランク王國の商業交易に對して抱く構想をとりあげ、史觀の異同が描き出す微妙な對立の一斑を紹介して、以つて吾々自身の問題を見定める一助としたまでである。

吾々自身の問題とは何であるか。一はフランク王國の商業交易史を、それ自體として内容的にたどりゆくことであり、他はかうした操作手段として、「歐羅巴世界の形成」を單に概念的ではなく、飽くまでも内面的・歴史的に、あつげゆくことに外ならない。<sup>(三三)</sup>すむれにしても、<sup>(三四)</sup>ビレンヌの本書は、吾々を示教するところ極めて多く、少くとも政治的動向と國家形成の原理とに於て、メロヴィング王朝とカロリング王朝との間に、誰もが蔽ひ難き大差の存することを認めなければならぬであらう。

(二六) Erna Patzelt : Die fränkische Kultur und der Islam. (Veröffentlichungen des Seminars für Wirtschafts- und Kulturgeschichte an der Universität Wien, hrsg. v. A. Dopsch, 4.) Wien 1932.

(二七) 前掲註(五)・(六) 参照。

(二八) E. Patzelt : a. a. O. S. 1-20.

(二九) E. Patzelt : a. a. O. S. 21-61.

(三〇) E. Patzelt : a. a. O. S. 62 ff. Kap. III : „Die Bedeutung des Nordens für die Entwicklung Europas in frühgermanischer Zeit.“ 参照。

(三一) 前掲拙稿『古ゲルマン文化連続性の問題』参照。

(三二) 拙稿『中世北歐商業の展開』(『社會經濟史學』第七卷第六・七號所收) 第一及び第二節参照。

(三三) E. Patzelt : a. a. O. S. 193-213. 参照。

(三四) からした問題に關し、述べた一見解をものした研究として、吾々はG. H. Dawson: The Making of Europe, An Introduction to the History of European Unity. London 1932. なを書を讀むべきであらう。

(昭和一五・四・一三)